

短 報

岡山県におけるカワラバッタの生息確認(2022-2023)

公益財団法人岡山県環境保全事業団 寺田 剛

Confirmation records of *Eusphingonotus japonicus* in Okayama Prefecture, Japan (2022-2023)

Takeshi Terada, *Okayama Prefectural Environmental Conservation Foundation, Inc.*

Abstract

The endangered grasshopper, *Eusphingonotus japonicus*, was recorded at the central part of Okayama Prefecture in 2022-2023.

キーワード: 昆虫, 直翅目, 絶滅危惧種, 河原

はじめに

岡山県内における本種の最も新しい生息記録は、青野(2018)の2017年8月の確認であり、池田(2018)においては、その2年前から2年間(2015年8月、2016年8月)県中部における確認が報告されている。これらの確認記録以降、2018年7月に西日本豪雨があったが、その後の本種の生息については公表された記録がない。西日本豪雨直後の2018年8月の池田(未発表データ)による調査では、池田(2018)の地点では生息が確認されなかったものの、他の1地点において本種が確認されており、西日本豪雨後の生息存続が確認されている。

その後、上記の生息確認から5年程度が経過したが、本種の生息状況については明らかにされていない。そこで、同地における本種の生息確認調査を2022年と2023年に実施した。なお、本種は岡山県版レッドデータブック2020(岡山県野生動物植物調査検討会(編), 2020)において絶滅危惧I類に挙げられており、分布情報が非公開とされていることから、本稿においても生息地情報を明かさず報告する。

確認状況

調査は2022年9月13日及び2023年9月16日に実施し、当該地の河原を任意で踏査し、写真撮影により記録を行った。この結果、いずれの調査日においても本種が複数個体確認され、連年での生息が確認できた(写真1)。なお、2022年9月18日には池田(2018)における生息確認地点を訪れ、簡易な探索を行ったが、2018年の池田(未発表データ)の結果に引き続き、本種を確認できなかった。

謝 辞

本調査は(故)池田綱介氏が、所属先の(公財)岡山県環境保全事業団に残された調査データに基づいて行われたものである。また、(公財)岡山県環境保全事業団環境調査部調査課(現・環境調査分析部環境調査課)の皆様には2022年の現地調査の実施に協力いただいた。記して御礼申し上げる。

引用文献

青野孝昭, 2018. カワラバッタ雌雄の出会い. すずむし(153): 1.



写真7. イツボシマダラキバガ



写真8. ゴマフキイロキバガ



写真9. マノヒメハマキ

池田綱介, 2018. カワラバットの生息を確認. みちしるべ(54): 594.

岡山県野生動植物調査検討会(編), 2020. 岡山県版 レッドデータブック2020動物編. 812pp. 岡山 県環境文化部自然環境課.



写真1. カワラバット♀ (2022年9月13日撮影)

報告

里山整備のための間伐及び炭焼き窯の修復

岡山県自然保護センター 藤田 拓矢

Thinning for Satoyama Maintenance and Restoration of Charcoal Kilns

Takuya Fujita, Okayama Prefectural Nature Conservation Center

キーワード: 炭焼き窯修復, 炭焼き, 間伐, 里山, 森林管理, 実践記録

はじめに

岡山県自然保護センター(以降、センターと称す)では里山をテーマとして様々な取り組みを行っている。平成8年度にシルバー人材センターの力をかり、当時炭焼き窯作りの経験があった方々に依頼して炭窯を作った。平成8年度から平成27年度にかけては炭を作る炭焼き体験を行っていた。しかし、平成28年度から令和3年度までは炭焼き窯の老朽化や人材不足により炭焼きを実施していなかった。令和4年度になり、ボランティアからの要望があって炭焼き小屋をメンテナンスし、炭焼きを行った(藤田, 2022)。結果として炭はできたものの、窯のハチから煙の抜ける場所があるなど、窯を今後使用するには不安があったため、伝統工芸木炭技術保存会に指導を仰ぎ、窯を作り直すこととした。センターでは、センター棟からピクニック広場にかけて常緑広葉樹の高木林が広がっており森としての多様性が失われている状況である。2020年、2021年と間伐をしており、多様な環境づくりを実施している(藤田・難波, 2021)。間伐した材については里山の循環社会を体現すべく炭焼きを行い燃料として活かすことで常緑広葉樹の高木林の解消を行い多様な環境を作るとともに里山管理を実践することを目的とする。炭焼き窯を直すことはセンターの維持管理の上で必要な要素であると考える。

炭焼きの実施

令和4年度より炭焼きをセンターで存続させるためにボランティア有志の方が集まり、炭焼きプロジェクトとして炭焼き小屋の修復及び炭焼きを実施した(写真1)。令和5年度になり、炭焼きの専門家である伝統工芸木炭技術保存会に炭焼き窯自体の修復が必要との助言を得て炭焼き窯を修復することとした。

○センターの炭焼き窯の寸法

センターの炭焼き窯の形状は上から見ると円形である。大きさについては、奥行き136 cm, 横幅140 cm, 高さ106 cmとなっており、床は煙突のある奥に向かって勾配がついている。焚口は横幅43 cm, 奥行き45 cmである。(図1参照)

○炭焼き窯修復の手順

炭焼き窯を修復するにあたり、既存の炭焼き窯のハチを落とし、窯内部に木を甲狀に詰めた後、蓆をかけて土を盛り、叩いて締める。その後窯を焼いてハチを乾燥させる必要がある。手順としては以下の通りであった。

1. 木材の切り出し
2. 古い窯のハチ崩し及び土の掻きだし
3. 木立て
4. 土作り
5. 甲掛け
6. 焚口の設置
7. 火入れ乾燥